

しかし、今まで戦闘参加し敵航空状況の監視、防空壕、掩体などの陣地構築等の働きが無駄になってしまったことが残念でした。また、ノモンハン事件での戦死者・負傷者の功は酬いられない。と同時に本日父上から手紙に同封した伊勢神宮両社のお守りを戴いたのは、子を思う親の心の有り難さをつくづく感じた次第でした。お陰で、数多い空襲の間、負傷せずに勤務を終えた感謝にも続いているものです。

二十四日、早朝起床、機材点検、阿爾山防衛の最後の監視哨に立つ。照射班の任務は本日で終了。晩は初めて穴蔵の中で寝たが、非常に寒かった。二十五日、帰営装備、阿爾山駅ホーム集結。十九時二十分、同駅発「誠に残念であり、また思い出深い生活であり、かつ戦友同志一致して、ソ連航空機と戦った愉快な面をもった一日、一日でありました」。ノモンハン事件の戦闘は厳しかったが、我が部隊将兵の意気は軒昂でした。

今まで申したことは、兵隊としての三カ年余の間、つけた日誌、日歴を参考とした私の戦歴でした。細か

い記録は大切な資料として大切に保管するつもりです。今発表されている個人の記録の多くは、どちらかというところ露悪になったり、興味本意のものでありがちであります。当時私は真面目に、一兵として書き続けたものであります。

満州での国境警備

終戦は台湾で憲兵隊

栃木県 手塚 敏雄

今の矢板市、大正十年六月十八日当時の泉村で農家の五人の兄弟姉妹の長男として生まれました。

昭和十六年徴集兵で甲種合格、昭和十七年一月、現役兵として、兵庫県の篠山連隊に入営しました。泉村から三人一緒でしたが、歩兵連隊で三カ月間の教育で特業は軽機関銃です。篠山の演習場は後に行った満州と比べれば箱庭みたいなものでした。関西の人とは言葉が違う「関東のボンクライ」などと言われたり、内

務班は厳しい、毎日ビンタを食らっていました。やはり県民性の違いもあり仕方がないのかもしれないかもしれません。

四月になったころ、満州へ出発した。我々の中隊は二つに分かれ、現地では第六中隊になりました。初年兵だけで配属ですが、前年は長野県、その前は茨城県の兵隊だった（補充部隊が第十四師団管区か）。行った時は第八十八連隊（前身は独歩第一連隊？）、満州では第七二八部隊でした。

春になった満州で再教育を受けました。軽機関銃も内地では九六式だったのですが、外地へ行ったら十一年式でした。部隊の所在は琿春で、ウラジオストクまで四〇キロの鮮満国境近くです。国境線なので皆緊張していました。

国境ですからソ連からの脱走兵もいました。その中に将校もいました。ソ連には女の軍医もいたらしいです。国境にはトーチカもあり、高い山には分哨が出ていて我々部隊はそこで警備をしたり監視をするのです。一二〇倍の眼鏡で見て、ソ連領の動きを全部師団へ報告します。分哨には十二、三名おり、一個大隊全部が

トーチカに入り警備し、三カ月くらいで交代しました。昭和十七年からほとんど国境警備でしたが、お陰で一選抜の上等兵に進級できました。昭和十八年になってから補充兵が入隊して来ましたが、その中には年配の召集兵もいました。現役兵と補充兵とでは体が違ってから余り厳しくはできないが、雪中、スキー、渡河では水付いた川をトラックに兵隊を満載してドンドン走れます。

国境では警備線に沿って鉄條網が張つてある。その間隔は百メートルくらい、したがってソ連の警備兵とすれ違うことはあつたのですが、私の警備のときには発砲事件はありませんでした。国境線にタバコを少し置いてやると、それをソ連兵が取っていたし、両国間の兵隊仲は険悪ではなく、ソ連兵は二人くらいで巡察していました。

琿春には一個師団駐屯していました。初年兵教育の助手になつたのは上等兵になって直ぐでした。北海道の現役兵教育三カ月間です。現役兵で体力はあつたので我々が受けたと同じ教育をしました。昭和十八年五

月ころですから、自分より一カ年遅れでした。春とはいつても寒さは厳しく、五月中旬でも地下五尺（一メートル六十センチ）ぐらいの所でもカチカチに凍っていました。弾薬庫の排水溝工事のとき、作業を初年兵にやらせて分かり、やはり満州は内地と違うと知りました。

満州での演習は連隊対抗とか、歩飛連合、歩戦（戦車）連合、歩砲連合とかやりましたが、演習のときも実弾で射撃する。北海道の兵とは違和感なく、週一度は初年兵と助手が会食しましたが、助手というのは初年兵と助教（下士官）や古兵との間で、いわゆる上と下との橋渡しで、つらいものです。

初年兵のとき「背囊と初年兵は叩けば叩くほど良くなる」と叩かれました。演習から帰ると、枕に赤いチヨークで金魚が書いてある（金魚は水が欲しい）枕カバーを洗えという意味）し、整頓棚の衣類が木銃で落とされていたときが度々ありました。

軍隊は階級ではなく、メンコ（食事の数、年数）の数です。したがって古い兵隊に言われれば、初年兵を

叩きたくなくても叩かねばならぬときもあります。しかし、私は初年兵教育を何回かしましたが、叩いたのは三回だけでした。軽機関銃の部品が紛失して、演習場を一行になって這って探させられた経験がありました。これも教育の一つの方法だったので。

昭和十九年二月まで満州にいましたが、第六中隊が第十中隊になり、第七二八部隊は琿春から朝鮮一釜山一門司、いよいよ第七十一師団として移動で、大きな船団を組んで出航しました。その間二週間かかりました。船は支那沿岸の島々を巡って敵の潜水艦を避けて航行する。その間一隻が船首をやられました。小破しただけでした。基隆まで十一日間くらいかかりました。

満州でも空襲が幾らかありましたが、台湾へ行ってからはだんだんと多くなりました。連隊本部は嘉義に駐屯し、台湾防衛のための陣地構築などを始めました。台湾の徴集兵は奥地から来た高砂族（入れ墨をした者もいた）で日本語がよく分からないので、台湾人の通訳を二人くらい使って教育をしました。初期的教育だ

けでしたが、高砂族は真面目で体力もあつたし、軍隊のことは良くやりました。本島人とのトラブルはなかつたようです。私の教育受持ちの初年兵は二十四、五人で台湾人が多かつたのです。基礎教育で一応の軍事教練、徒手教練、銃剣術等をしていました。

陣地は山に作つたが、壕が主で掩蓋も作つて、それぞれの部隊を配置するようにしました。ところが、嘉義市は空襲で一晩で焼失してしまつた。街の形は全然なくなつてしまつたほどの大空襲でした。そのため本部は彰化へ移動しました。

その後、私が軍司令部へ行つたとき、洪水のため貨車が転覆し、朝四時から夜の十二時まで歩いて帰つたのですが雨に濡れてマラリアが出て、線路伝いに病院へ入り、治癒まで一カ月かかりました。病院には多くの患者がおりました。

その後、大隊本部付きとなり、次いで連隊の補給中隊になり、食料の買い付けなどをしました。水牛の牛車に貨物を載せ、現地人を馱者とするのですが、三〇台となると延々と続く。当時は伍長で責任者になつて

いましたが、中隊長は候補生の時叩いた人でした。その時は候補生が返納した衣服にシラミが付いたままだつたからです。中隊長は赴任されたとき、酒を持って来られ「班長飲んでくれ」と言われました。昔の助手に対し、将校になつた中隊長がわざわざ酒を持って来られたのです。教育に携わつた者にとつての喜びであり、感激でもありました。

八月十五日、終戦玉音放送は台湾人の医師の家で聞きました。そのころ、終戦前に憲兵を募集してしまつた。これは治安維持のためでした。そこで私は試験を受け憲兵となりました。したがって内地へ帰るまで憲兵でした。中国軍が上陸して来ました。それまでは各航空隊などに配属になっていたのですが、憲兵だけは武装解除になりませんでした。中国軍は兵力が少ないので日本軍を治安維持のため使つたのでしよう。

終戦後の事件として、台湾人が日本国旗を破つたのを日本兵が叩いた。それを、謝りに行き事無きを得たことがありました。終戦で本島人の態度も変わったのですが、台湾人との関係は悪くありませんでした。五

十年間日本領だったから上流階級の子供は日本語しか分らない。そのため中国軍が入って来てから中国語を習いに行っていました。

昭和二十一年三月まで台湾におりましたが、その間憲兵隊の分隊は四十八名で終わりまで一緒でした。分隊長は大尉で、戦犯にはならなかったのですが、危ないというので帰国は早く、しかも駆逐艦「櫻」に乗り、一日で鹿児島へ上陸しました。

帰国後、憲兵だったためか公民権停止が一カ年ありました。内地へ帰ってから一年以上マラリアで悩まされましたが、富山の薬屋からキニーネを買って飲んでいました。雨の中や水に入るとマラリアが出たので田圃仕事はできませんでした。

その後は農業をしていましたが、現在は子供が継いでくれて、私は老人クラブの幹部をやっています。旧泉村から入営した三人は生きているし、今でも長野県や北海道の戦友などと中隊の戦友会を毎年やっています。

一兵士の従軍記

馬と鳩と共に

愛媛県 金子 国雄

私は愛媛県立西条中学校四年生在校中、満州開拓義勇軍第四次愛媛班班長に応募して学校を中退し、茨城県の内原訓練所（所長は有名な加藤完治さん）へ入所した。時に昭和十三年十一月のこと。次に満州国北安省慶城県の不二訓練所へ移ったのは昭和十四年三月。寒い寒いを耐えて、満州建国、第二の日本を夢見て若い力を傾けつくした。

徴兵検査は昭和十七年六月ハルビンで。第一乙種合格。現役入営は昭和十七年十二月十五日。

その当時の我が家の事を述べると、

父 健在 台湾花蓮港で呉服商

母 死去 （昭和八年十月二十二日）

兄三人 健在 農業、従軍僧、新聞記者